幼児の教育　第97巻　第5号　平成10年5月1日(毎月1回1日発行)昭和23年4月15日第3種郵便物認可　ISSN0289－0836

幼児の教育

奈良女子大学 平成10年 図書館

家庭-保育所-幼稚園

1998 5

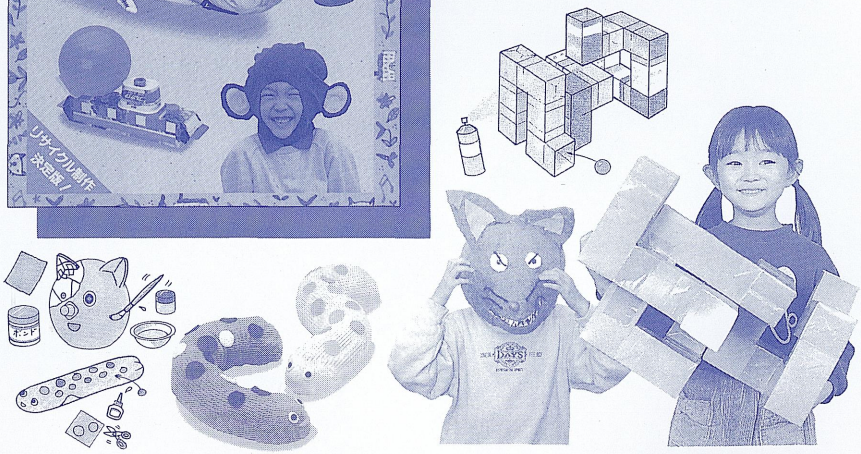
第97巻 第5号 日本幼稚園協会

手づくり保育シリーズ　14　**新刊!!**

つくってあそぼう！

リサイクル素材

牛乳パックやペットボトルなど身近にあるリサイクル素材を使って楽しくあそべる新作を紹介します。
小さいものから、全身を使ってあそべるものまで、新しいアイデアを盛り込んだ制作集。
おとなはもちろん幼児まで自分で作ってあそべます。



ねもと　いさむ著

B５判　96頁　定価 ：本体2,200円＋税

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第97巻　第５号

幼児の教育

目次

——第九十七巻　第五号——

幼稚園教育に学ぶ……小川　聖子…（4）

子どものいる暮らし—男・夫・父　共に過ごす暮らしの中で…新山　裕之…（10）

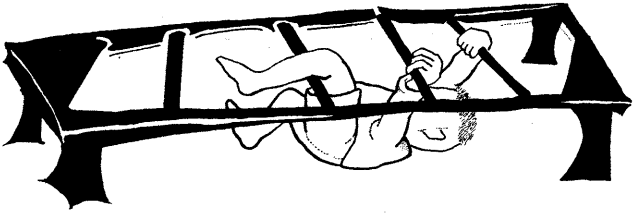
「児童の世紀」を振り返る—その七—……本田　和子…（15）

遠くを眺める……津守　真…（24）

ある日の育児日記から(89)……佐藤　和代…（31）

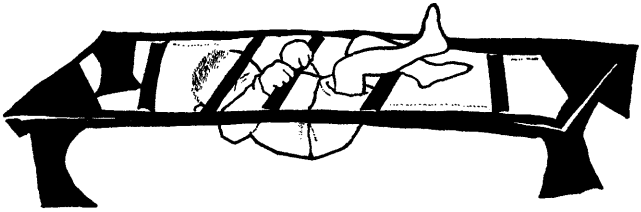
幼稚園の日々　片隅の自然の魅惑……樋口早百合・無藤　隆…（32）

© 1998
日本幼稚園協会



震災後の子どもたち⑳　わたしも子どもだったときに……上崎　温子…（34）
『ポケットモンスター』考―人気ゲームの光と影……山本　政人…（40）
夢の日々㈤　枝の一生……大多和　檀…（46）
滄桑の街・香港から⑹　香港の語学事情……今井　七重…（52）
A夫との日々……吉岡　晶子…（57）

表紙絵／佐藤　寛子
扉題字／津守　真
扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット／彌永たたえ「上空」
編集委員／田代　和美・上坂元絵里・吉岡　晶子
編集部／仲　明子



幼稚園教育に学ぶ

小川　聖子

平成八年四月からの一年間、生活科の研修としてお茶の水女子大学で学ぶ機会を得た。その際、大学の授業の一環として、附属幼稚園の保育を参観させていただく幸運に恵まれた。幼稚園教育について学ぶことは、「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考える」ことを目標とする生活科にとって、大変有意義なことであると考える。ここでは、一年間の幼稚園での観察を通して学んだことを、年長児クラス（五歳児）での製作活動を中心に、具体的に述べてみたい。

友達とのかかわりの広がり

――車作りを通して――

このクラスでは、十月ごろから車の製作が始まった。最初は、二、三人が部屋の隅の方で作って遊ぶくらいであった。五か月後の二月には、男の子の半数である八人の園児が、「ミニ四駆」と呼んで夢中で車を作って遊ぶまでに、活動の広がりをみせている。また、その間、作られる車にも変化があった。はじめは、ダンボールをハガキ大の長方形に切って車体にして、その裏にストローを二本平行に張り付ける。そこに、竹ひごの車軸を通して、フィルムケースのふたをタイヤにして付けただけの簡単な作りの車であった。それが、素材は、ダンボールよりは薄くて切り易いが、ある程度の硬さをもった板ボール紙へと、形はより流線形へと、工夫され変化してきた。このような過程で、車を作って遊ぶという活動を通して、友達とのかかわりが広がっていったE男について述べてみたい。

E男は、工作が好きで、手先も器用。かなり高度な作品を作っている。集団でのごっこ遊びや砂場遊びに加わることは余りなく、どちらかというと一人で黙々と製作を楽しむタイプであった。細長く切った紙を丸めて球形にして巧みにボールを作る（九月十二日）、飛び出すロケットや大きな船を作る（九月十九日）、砂場で砂鉄を集める（十月十七日）など、次々と一人で作っていく。しかし、それらのおもちゃを使って友達とかかわって遊ぶ姿は見られない。

十月二十四日、この日も、部屋の入口付近にある担任用の机で、ラップの芯を利用した笛を作っていた。その近くの床の上で、I男とO男が、先週から作り始めた車で遊んでいる。E男は二人の活動が気になるらしく、製作の手を休めては、じっと見てい

る。声を掛けたり、仲間に入ることはしない。一時間ほどして、車遊びをやめたO男が、担任に亀の作り方を教わりにくる。これは、以前E男が作っていたものであったので、担任は「E男君のほうがよく知ってるみたいよ」と言って、E男に教わるように促す。O男は、相変わらず担任用の机で製作しているE男のところへ行くと、作り方を教わる。それから三十分程、二人のかかわりが続く。

二週間の間があいて次に観察した十一月七日には、車にかかわっているのが、E男、O男、I男、J男、B男の五人に増えており、E男も手作りの車を持って、遊びに加わっている。B男の「テストコース、行こうか」の声に、五人は園庭に出る。滑り台で車を走らせて、速さを競って遊ぶ。

十一月二十八日、E男は、保育が始まるとすぐに、自分の車を手にして、O男に「競争しよう」と声をかけて、自分から遊びに誘うようになる。この頃から、E男が製作する場所も、部屋の隅にある教師用の机から、真ん中においてある子ども用の広い机へと変わってくる。そこで、同じように車を作っている仲間に囲まれて、一緒に製作するようになる。工作の得意なE男の作る車は、形もよく、速く走るので、他の子が、それをまねて作るようになる。また、「スリップしないように冬用のタイヤにする」と言って、フィルムケースの蓋を二つ付けてダブルタイヤにしたり、コースに合わせて車の形を変えたりといったE男の工夫が、説得力をもって、周りに受け入れられていくようになる。車作りを介して、E男のよさや存在感が、ゆっくりとではあるが、確かに仲間に広がっていくように感じられる。

一月十六日、M男と一緒に、担任に教わりながら凧を作っている。以前のE男なら、一人で作って、一人で遊んだかもしれないが、この日は、車作りでかかわりの生まれたM男やJ男と一緒に遊んで

いる。友達関係の広がりは、他の活動にもよい影響を及ぼしているように思われる。

一月二十三日、この日は、E男の提案で、S字型の滑り台で競争したり、遊びのルールを決めたりと、遊びをリードするまでになっている。この頃から、「E男（の車）、速いんだよな」とか、「おれは、（E男の車に）負けないぜ」、「E男、なかなかやっつけられないんだぜ」という、E男の車についての会話が聞かれるようになる。E男の車が、仲間の間で一つの基準になってきているようだ。

新しく仲間に入ったK男は、工作が余り得意でないが、E男の車体を型紙にして車を作っている。E男は、そんなK男に対して、自分から「できた？」と声をかけて心配している。満足のいく車が作れて、楽しく遊んだK男は、昼食のお弁当の時に、自分からE男の隣にいすを持っていき、一緒に食べている。車作りをきっかけに、他の活動も一緒にしたいという気持ちを引き出している。

また、以前から一緒に車を作って遊んでいたJ男は、登園すると担任の次に、まずはE男に、「E男君、おはよう」と声をかける。J男にとって、E男は大切な友達になっているようだ。

一月三十日、E男は車のチーム名の取り合いからM男と喧嘩となる。すぐに和解するが、これも一人で

黙々と製作していた頃のE男には考えられない、友達とのかかわりの多様化の一つではないだろうか。

このように、単に車を作るという対象とのかかわりだけで、活動が終わってはいない。車を作って遊ぶという活動を通して、友達とのかかわりが生まれ、個性が認められるようになり、自信を得る。それが、今度は、自分から、友達とかかわりたいという意欲へと発展し、人間関係を広げていくようになるものと考える。

保育者の援助

保育者の援助のしかたについて、製作場面を例に述べてみたい。

子どもに「作って」と頼まれた時、その子のイメージに合うように、希望を聞きながら作る

「浦島太郎を作って」と頼まれた担任は、絵本を見て描いてあげる。子どもは、本物そっくりの浦島太郎に満足して、活動に弾みがつく。また、担任のやり方をじっと見ていたこの子は、次からは、担任のまねをして、本を見て調べるかもしれない。

技術的に難しいことは手伝う

子どもの力や技術では無理なこと——例えば、硬い紙を切ったり、小さい穴にゴムを通したりなど——には、手を貸している。作品がその子の思い通りに出来上がり、本人が活動に満足できることを大切にしているように思う。

見本を示し、参考にするように促す

車の車体が上手く作れなくて困っていた子に、車体の型紙を渡し、形を取らせる。そのことで、子どもは、つまずきをクリアすることができ、車を作りあげることができた。

使いそうな材料や道具などを、さりげなく机の上に置いておく

登園前の部屋の子ども用の机の上に、担任が、定規を一本と厚紙数枚を準備している。車作りに夢中になっている子が、登園するとすぐにその机の前に行き、厚紙に定規で線を引いて車の部品を作り始めた。担任の予想した活動に、ぴたりとはまっていくようにみえた。

友達とのかかわりを広げるような言葉かけをする

担任に、おもちゃの作り方などを聞きにくる子どもに、「たしか、○○ちゃんが、上手に作ってたわよ」、「○○ちゃんに、聞いてごらん」、「○○ちゃん、この作り方教えてあげて」といった言葉を返し、子どもたち同士のかかわりができるように、積極的に働きかけている。

新しい活動を紹介する

以前に作ったことのある、紙飛行機を作りたいといってきた子どもに、「同じように、飛ぶものでも、凧もあるのよ」と言って紹介する。凧作りに興味を示したその子に、作り方を教えながら一緒に作ったところ、周りの子も関心を示し、凧揚げが広まっていった。

このように、一人一人の子どもの思いや願いに応じた多様な援助をしていくことが、主体的に環境にかかわって遊び込む子ども達を育てているのだと感じた。

（埼玉県行田市立南小学校）

子どものいる暮らし―男・夫・父

共に過ごす暮らしの中で

新山　裕之

父親の存在とは？

このところ、親が我が子を虐待する事件をしばしば耳にする。そのたびに新聞記事に載る親の言い分は、大抵「言うことを聞かなかったから」である。言うことを聞かなかったから……。三人の子どもをもつ親として、わからなくはないという気持ちもある。けれど、やはりその親子はどこかでボタンの掛け違いをしてしまったのではという悲しい思いが心に残ってしまう。

核家族では父親は一番強い存在である。もちろん、そうでない家庭もある。しかし、父親は家庭

の中で一番わがままな子どもになってしまう可能性ももっているのではないだろうか。

そして、いつのまにか

――子どもは親の言うことを聞くものである――、

――子どもが親の言うことを聞かないのは許せない――という一方的な論理が生まれてしまう。子どもは親のものではないし、親が勝者で子どもが敗者でもないはずなのに。

そんなことを思い、さて自分は子どもにとってどんな父親なのだろうか?と考えたとき、まず頭に浮かんだのが、私の父親のことであった。

父の思い出

昔はよく雪が降った。我が家の近所のお寺には脇の斜面にお墓があって、その通路が格好の滑降コースになっていた。雪が降ると、そこで友達とよくソリ遊びを楽しんだ。ソリは、もちろん木製。今のプラスチックのような物はなかった。そのソリを父親が作ってくれるのをワクワクしながら見ていたことを覚えている。

板で座るところができると、次に、切った竹を風呂場の焚き口の火であぶり、曲げる。父がぐっと力を込めると竹を曲げるのが魔法のように見えたものである。そして、スキーのような形になったその竹と座席を合体させるとソリのできあがりである。滑降コースの最後のジャンプ台をビューンと飛んでもびくともしない立派なソリだった。

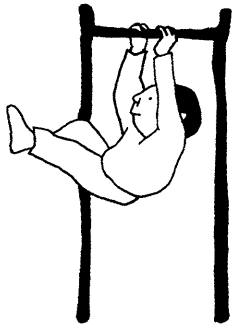
雪が降ったからソリ遊びをしよう。でもソリがないからお店で買ってこようという生活は、いかにも消費生活そのもので好きになれない。まして、こんな思い出は残らないだろう。

そんなことを思い、先日の大雪の時には、子どもと一緒に、家にある棒や板を使って雪かきスコップを作って雪かきやソリのコース作りをして汗を流した。

自分の手で作る喜び

田舎にある我が家の回りには、材木や薪や竹など何かを作ろうと思えば、材料はごろごろしていた。高価なものや立派なものがあったわけではないが、その分、自由に使える物や環境が自然を含めて、たくさんあったのかも知れない。

父親が作っているところを見るだけでなく、小さい頃からのこぎりやなたをいたずらして使っていた。そのためか、今も家の中でなにか都合が悪いところがあると、その辺にあるもので、工夫して作ってしまう。仕事場でも、子どもたちと一緒に遊びに使う物を作るのは楽しい。



先日、研修会の帰り道。久しぶりに、趣味の路地裏ぶらぶら歩きを楽しんだ。青山通りを表参道から赤坂見附まで。途中、素朴な字で「木の仕事」という小さなギャラリーのポスターが目にとまった。無垢材を使って家具などを作っている、かつみゆきおという家具職人の個展の案内だった。

小さい頃から身の回りには木があり、何かを作ったり、風呂焚きで毎日薪に触れていたからか、木にはなぜか親しみを感じる。吸い寄せられるようにギャラリーに入っていった。

落ち着いた仕上がりの大きな机を手で触り、椅子に腰掛け久しぶりに木の温もりを存分に味わった。ギャラリーの女主人と、しばらく木の話などをした後、木の筆箱を求めて帰ってきた。箸箱のようなデザインで、小学生の頃の木造校舎のような匂いがして懐かしい。仕上げに塗ってある塗料は何かわからないが、もらってきたかつみさんの書いた文章によると、自然を冒さない自然塗料であるらしい。使い込むうちに艶や風合いが出てくることを期待して、大事に使いたいと思っている。

帰り道、自分でも作ってみたいという思いがムクムク湧いてきた。帰宅して子どもたちにお父さんが筆箱を作ってあげようかと申し出てみるが、反応はいまひとつ。でもいい、今度の長い休みには、作る父の姿を見せたいと思う。

そういえば、今度一年生になる末息子が自分で机を作るから牛乳パックを集めておいてくれと言っている。この申し出はとてもうれしいものだった。必要なものは買えばいい、という発想ではなく、必要だから自分で作ろうという構えがあることがとてもうれしかった。

実はこれこそが我が家の子育て・暮らしのモットーだからである。

日常を共にする

一緒に物を作ることはそれだけでなく、その時間を共に過ごし空気を一緒に吸っていることに意味がある。物や環境をお金で買い与えるのではなく、日常を共に過ごすことやそこでのかかわりを通して、子育てはするものだと思っている。

特別な環境を与えたりすることはない。だから我が家には子ども部屋がない。まして、子ども用の勉強机もない。必要があれば、勉強はどこでも

できる。これはあなたのためよと、個室と勉強机を買い与え、塾に入れようとは思わない。学校や塾の勉強だけが生きる力になるとも思わないから。また、家族の一員である以上、子どもといえども、学校の勉強よりもまずは家のことが優先する。できないことは要求しないが、家の中でそれぞれができることをして、共同生活を営んでいる。風呂掃除や布団の上げ下ろしは、もうすでに完全に子どもたちの守備範囲になっている。最初は教えるのに苦労したり、子どもにやらせた後、いつも大人がやり直ししなければならないこともたくさんあった。しかし、その手間は私が父と一緒にソリを作ったのと同じ意味をもっている。

特別なことをお金をかけてするのではなく、身の丈の日常生活の中で人や物とかかわっていくことを大事にしたいと思う。その中で子どもだけでなく、親である私も妻もお互いに学び、育っていきたいと思う。

疲れて帰ったときには、子どもたちの騒々しさにうんざりさせられることもある。

でも、同じように疲れて帰ったとき、子どもたちの騒々しさにほっとさせられ、心が癒されることも多い。子どもたちのいる暮らしをありがたいと思う。

我が家の夕方は、家族が襖も取り払ったひとつの空間の中で、それぞれが別々のことをしながら同じ空気を吸って過ごしている。お互いの気配を感じながら、それぞれが自分のことをしている我が家が私は好きだ。

（芝浦幼稚園）

「児童の世紀」を振り返る

――その七――

本田　和子

子どもと深層心理学の運命

子ども関係者たちが、ユング派の理論や昔話解釈、あるいは箱庭療法などに関心を示し始めたのは、いつ頃だったろうか。それは、恐らく、一九七〇年前後。パラダイムの転換が唱えられ、ポスト・モダンなどいう華やかなキャッチフレーズで、近代合理主義への批判が賑々しく繰り広げられていた時期と連動しているのではないか。わが国ユング派の総リーダー河合隼雄の『ユング心理学入門』が人々

の手に取られ、普遍的無意識とか原型などいう不思議な概念が、理解し難く捉えにくいものながら何かしら新鮮に関係者たちを魅了し始めたのがこの時期だからである。

フロイトに始まる「無意識」概念とその応用である解釈理論は、当初は治療理論として、後にはそれらの実践にも勝る文化運動として、今世紀初頭の西欧諸国に展開され、とりわけアメリカ合衆国では、一九二〇年代には早々と通俗化されている。その結果、大衆レベルの受容を容易にして、その社会的地位を確かなものとした。さらに、第二次大戦中にウィーン学派の精神分析家たちが亡命者として大量にアメリカに流れ込んだこともあって、彼の地の精神分析運動が、フロム、エリクソンなどのスター学者を輩出させ、理論・実践の両面で華々しい展開を見せたことは周知であろう。また、精神分析学と人類学や社会学との結合が、今世紀の知的世界に与えた影響の大きさ・豊かさも否定さるべくもない。

ところで、わが国の場合、今世紀前半にはフロイトの翻訳・紹介が行われ、精神病理学の世界に導入され、一方、新奇なものに引かれる芸術批評家たちによって精神分析的批評が試みられ始めてはいた。しかし、フロイトが「ヒステリー研究者」と狭く位置付けられたことや、「幼児性欲の承認」を要件とする正統的フロイト派の主張は、わが国の子ども関係者になじみにくいものだったらしく、子ども関係者たちの間では、久しく不問に付されていた感があった。

もっとも、フロイトの名前そのものは、一九〇八（明治四一）年の『児童研究』第一二巻第九号、あるいは翌年の第一三巻第二号などにちらりと顔を覗

かせている。たとえば、医学士菅原道夫による「小児の性欲に就いて」という連載記事のなかに、小児性欲に関する代表的文献として「独逸ではFreudの著書」が上げられ、また、ヒステリーや神経衰弱症のような官能性神経疾患の原因を生殖興奮と関連付けて考えるという点で、フロイトの説も、「一面の真理かも知れぬ」と肯定的に紹介されたりもしているのである。

この時期、わが国の医学会や教育界の一部に「子どもの性欲」を巡る問題意識が発生し、「性欲論」や「性欲教育論」が勃興しかけたらしい。たとえば、引用した菅原の記事も三年を越える長期連載であったし、また、医学者、医学史家として著名な富士川遊なども、子どもの性欲について積極的な発言を始めていた。しかし、それらに対する教育学あるいは教育者の側からの反発も強く、『教育学術界』第一八巻第三号には、文学士龍山義亮による「性欲教育問題に就いて」と題された反論が掲載され、富士川やマルクーゼの見解には賛同し難い旨が述べられている。

わが国の子ども関連業界に、どのような事情で「性欲論」が導入されたのかその経緯は判然としない。しかし、子どもを対象化し客観視しての「子ども研究」が軌道に乗り始めるにつけ、彼らもまた、幼いなりに性的動物であり、性的行動と無縁ではないと認識され始めたのではなかったろうか。そして、そうした認識の背後には、ヨーロッパの異端的ニューウェーブ、G・フロイトの名前がちらついていたのかも知れない。いうまでもなく、性欲教育に関する言及のすべてが、フロイト理論を直接的に参照していたわけではないし、また、否定論にしても、格別、フロイトを標的としているわけではない。しかし、賛否両論ともども、恐らくは「子どもにも性欲を認めるべき」とする新しいヨーロッパの

風に髪をなぶられていたことは確かであろうし、間接的ながらそれに触発されての「小児性欲」への注視であったろう。

ところで、ここで見たように、幼児性欲論に対しては、すかさず反論が提示された。しかも、これらの反論には「劣情」とか「羞恥心の毀損」とかいう道学者的言辞がちりばめられ、結果としては、高等教育の場は別として、それ以下の対象に関しては性欲論議およびその教育は不問に付すことこそ妥当とされているのである。

とすれば、「幼児性欲論」は、「性欲」を「劣情」や「羞恥心」の類縁関係におく道学者的教育観によって退けられたということになる。ここに反映されているのは、当時の子ども関連業界でのフロイト受容の限界かも知れない。つまるところ、それは、わが国流の子ども観と合い入れぬものとされ、触れぬこそ賢明とばかりに葬り去られたのである。先に述べたように、遅れてきた湖畔詩人たちの周辺から、「子ども賛歌」が澎拝と沸き起こってきた時代でもある。「無垢」と「純真」の代名詞のような子どもの言動が、その実、「性欲の発動」に過ぎないと考えることは、当時の人々の子どもへの想いを裏切るものと見えたに相違ない。

パラダイム・チェンジと保育界のニューウェーブ

冒頭で触れたように、一九七〇年代に、子ども関連の人々は精神分析的解釈に寛容になり、それどころか、積極的な関心をすら示し始めた。しかし、この動きは、必ずしも、フロイト理論そのもの、特に「幼児性欲」を、関連業界が承認したということを

意味するものではない。むしろ、私どもはここに、子ども関連者たちをも無自覚のうちに絡め取り始めたパラダイム・チェンジの動きを見るべきであろう。それは、一口に言うなら、理性中心主義・科学主義・合理主義への疑念と、身体性・情動性・非合理なものへの接近とまとめることが出来るかも知れない。

先にも触れたが、子ども研究の王座は、今世紀に急成長した科学主義的児童心理学によって占められていた。教育も、これら児童心理学の結果に立脚して、科学的であることが求められた。教育の世界も例外ではなかった。単なる観念に依拠するのでなく、科学的データに立脚して実証的であることが当為とされ、教育調査や教育実験の結果が教育実践に応用されるだけでなく、現場研究もまた、科学的であろうとして短期間で実証可能な問題にのみ焦点を合わせ、「研究のための研究」と批判される傾向も発生したりしている。

しかも、それら客観性の保証が数値によってなされたため、研究は、さながら、動的で多層的な現実を「数」という単純な表現に置き換えることのように、錯覚される風潮すら生じかねないありさまであった。大型計算機と多変量解析手法の発達が、この錯覚に拍車をかける。複雑で動的な現象が数量変換性という視点から分節化され、その抽出部分が数量に変換される。そして、これらの数たちの運命が大型計算機に委ねられ、そのなかで行われるもろもろの処理の結果が、研究仲間の眼前にある「数値」として提供されるとき、これこそが動かし難い「客観的真理」であると仲間たちを納得させたのであった。

しかし、こうした動きに対して、深層に胎動し始めた異議申し立てが、密かに探り当てた別の視点の一つが、先の深層心理学的視点と言えないだろう

か。非合理と言えば非合理、科学的でも客観主義的でもなく神秘的で謎めいたユング心理学が、大衆の注視のなかに迫り出してきたのも、恐らく、こうした動きと無縁ではなく、追求され続ける数量主義とは、ポジとネガの関係に位置する。

保育研究の世界にも、漸く新しい蠢動が見え始めたのが、この時期でもあった。数量化されないものなかにも、掛け替えのない真理が潜むのではないか、あるいは、研究者から「観察されるべきもの」あるいは「実験されるべきもの」として切り離された「子ども」と、保育現場で保育者と生を共有する関係的存在としての「子ども」は、同質であり得るのか否か、など、科学的研究の名の下に操作され、時には切り捨てられざるを得なかったもろもろに光りが当てられ、それらまるごとの現象をまるごと思索することこそ「保育研究」と呼ばれるべきではないか、と、改めての問いが提出されたのであった。

「保育研究」に起こったこのニューウェーブに関しては、ここでことごとく論じる必要はないだろう。私どもの極く身近に、この三〇年ほどの間に起こった研究の動向を想起することは容易である。現象学的保育研究、とりわけ津守真らによる一連の研究、現象学的と呼ばれるにまして、実践・思索の反復型などと位置付けられることもあるが、それらは、いまでは保育界の主流となり保育研究の指針とすらなって高く評価されている。あるいは松村康平の提唱などその先駆的な例と言えるが、その後広く敷延された関係論的視点、さらには、エスノメソドロジカルな子ども研究など、いくつかの用語とカテゴリー概念は、当初の新奇さを越えて、いまや私どもの耳に親しいものとなりつつある。そして、それらのすべて

を引っくるめて、客観主義一辺倒の数量化による科学主義の効用と限界を自覚する心性の広がりを認めることが出来よう。

先に触れた精神分析的な視点、あるいは、深層心理学的視点というべきかも知れないが、それらも、こうした心性の変化と連動する。ユングという人は、さらに日本の河合隼雄は、昔話は人間の深層世界の反映であるとして、そのなかから「母なる者」のイメージや「心的通過儀礼」のありようを探り出して見せる。さらには、この派の人々は、治療をクライアントとセラピストが共同で紡ぎ出す「物語」であるとし、それを物語的に綴り解釈することを提唱する。科学主義というにまして文学主義とでも呼びたいこうした考え方が、いつか、さほどの違和感もなく受け入れられ、やがて、「保育の物語的把握」などいう概念すら通用させてしまった。そして、こうした動向の端緒が、一九七〇年代にあったことを考えるなら、子ども関連業界は、遅ればせながらこんな形で、パラダイム・チェンジの動きに応えてきたと言うべきかも知れない。

「子ども論」の活性化

いま一つ、振り返る視界に浮かび上がるのは、一九八〇年代における「子ども論」の活性化現象であろう。今世紀半ば以降、「子ども」は、発達が語られ教育や養護が議論されるそのときに、始めて、対象として主題化されるものであった。つまり、今世紀初頭を彩った「子ども賛歌」が影を潜めて以来、「子ども」は、文学や絵画の世界を別とすれば、「子どもという存在そのもの」として単独の主題となる機会を失ったのである。

しかし、その「子ども」が主題として復活してくる。「子ども学」という用語が試行的に使用され、大人と世界を共有する異質の存在が注視される。村

瀬学、小浜逸郎らの子ども論や拙著が、その内容を越えて異常なまでの注目を浴び、子ども関連業界の外にあふれ出して広く話題を呼んだことも、こうした現象の一端と位置付けることが出来よう。

メディアのレベルで言えば、従来は、日刊紙の一般書評欄に、子ども関係の著書類が取り上げられる機会は稀であって、それらは、しばしば、「家庭欄記事」として紙面を賑わすのが常であった。しかし、このころから、そうした一種の差別とも言うべき扱いが撤去される。先に引いた村瀬・小浜・本田などの著作は、いずれも、他の一般書と並んで書評の対象とされ、論議の種とされたのである。言うまでもなく、日刊紙に取り上げられることと、そのものの評価は別である。しかし、少なくとも、「子どもを語ること」が、片隅にくすぶるマイナーで特殊な行為であることから解かれて、「大人」や「社会・文化」を語る他の諸領域と、肩を並べるところまで失地回復したことだけは認められてしかるべきであろう。

さらには、従来「子ども」と無縁と見えた哲学者や文化学者、あるいは評論家たちのなかに、「子ども」を視野に入れて論を立てる人々が目立ち始めたのも、この時代である。わが国の場合を例にとれば、哲学者の中村雄二郎や文化人類学者の山口昌男、国文学者の前田愛、あるいは、民族学者宮田登、宗教学者山折哲雄などを上げることが出来る。これらの人々は、それまでは格別「子ども」関連の学問や事業に携わることもなかったのだが、このころから、おりに触れて「子ども」に言及し、あるいは、その専門的論稿のなかで「子ども」を主題化するなどして、従来とは異なる「子ども」への関心を示し始めたのであった。しかも、

この人々は、いずれも、「ポスト・モダン」などと称されたこの時代の、オピニオン・リーダー的立場にあった人々であったことも特記に値いしよう。

とりわけ、評論家柄谷行人の「子どもの発見」を論じた一文は、多くの人々に注目され大きな反響を巻き起こした。それは、近代の作り出した諸制度の起源を問うまなざしによって、「子ども」をも捕らえ返す試みであった。彼によれば、現在、私どもの眼前に存在する「子ども」とは、前近代とは記号的布置の変化した近代的心性によって発見されたものに他ならない。発見の結果として、彼らは凝視され輪郭を与えられて、「子ども」というカテゴリー内に収められる存在と化したのだ。というわけで、私どもに「子ども」と見える彼らは、近代社会によって虚構され枠付けられた、一種の「制度」であるという主張であった。

同じこの時期、私どもは、フランスの歴史学者ph・アリエスの『アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』（邦訳題『〈子ども〉の発見』）と題された論稿に触発され、大きな衝撃を受けている。すなわち、生物的実存在としての子どもと、時代のまなざしの所産としての「子ども」との差異に気付かされたのだ。上記柄谷の論稿は、アリエスを踏まえたものではないとのことだが、アリエスのそれと響き合うものを持ち、「子ども」の周辺にうねり始めた時代の流れを感じさせるものがあった。アリエスの言を借りて言えば、「子ども」に注がれる「まなざし」が、少しずつ少しずつ、変わり始めたのである。

（聖学院大学）

遠くを眺める

津守　真

私がM郎と出会ったのは小学校一年生のときだった。

M郎は、一人でブランコに乗っていた。その寂しげな姿が私の気をひいた。こういう最初の印象が何にもとづくものなのか、後になって次第に明らかになってくることがある。M郎のその経過について記したいと思う。

遠くを眺める

寂しげな印象をもつと、人は折りにふれてその子を注意深く見るものである。M郎は高いところにのって、遠くを眺めていることがしばしばあった。何を眺めているのか。足元には良いものがなくて、どこか遠くに幸いがあると思っているのではないだろうか。

水の流れ

M郎は水の流れに関心があった。大人がバケツをもってきて水をいれてあげると、M郎はたらいのなかで絵の具をいじり、バケツに手をいれて水をこぼした。色水が流れる。水の流れが滞るところを私が流れるようにすると喜ぶ。

ある朝、物置の上に乗っていたので、私はそばに行った。向かいの建物の屋根から遥か遠くを見ているみたいである。すぐに私に肩車を求め、流しに行き水を出した。そしてホースをとって、ながしの外に向けた。私はバケツで受けて水が部屋の中に入らないように防いだが、M郎は水をどうしても外に出したい。私が砂をM郎の身体にかけると次第にそれが面白くなった。M郎はそれまで幼児期に砂遊びや水遊びをしたことがないのではないかと思われた。

しばらくやってから、ドライエリアに出る扉に走って行き、からめてある針金を敏

速にほどいた。門の外に出て行きたいのは明らかだった。自分の目的を達するためには知恵をはたらかせることに私は驚いた。こうしてM郎とかかわって、ひとつひとつの時が面白いと、午前の一時間以上が私には一瞬に思えた。

それから私は折りにふれてM郎の傍らで過ごした。私がそばに行くと、M郎は私の手を握ってはなさなかったり、私に体をすりよせてきた。M郎は大人と外に行くことを好み、私はときどきM郎と公園に行った。

公園の朝——林の中の音と光

ある日、私はM郎と学校の隣の有栖川公園に行った。M郎は自分でどんどん走って公園のなかに入り、水の流れに直行した。学校の庭の小さな流れではなくて、ほんものの小川の飛び石を何度も往復した。じっと流れを見る。小川から池のほうを見ると視野が遠くまで広がる。晴れた空、冷気が肌にふれる林、木の枝の間から日が射す。小鳥の鳴く声、水の落ちる流れの音、鶏のときの声、M郎は、木の葉を拾って耳のわきにあて、指先でもむ、私も同じようにしてみると、微妙な音が聞こえる。教室でもよくブロックを耳のそばで打ち合わせたり、音を聞いているのを思い出した。午前の公園は、耳をすますと、小さな自然の音に満ちている。丁度、生後半年にもならない赤ん坊が、窓の外の小鳥の泣き声や台所から聞こえる母親の包丁の音に、静かに耳を

傾けて楽しんでいるのに似ている。自然の静かな音は、人の心の故郷である。この自然の中にいるときには、子どもは周囲の世界を信頼するに足るものとして認識するであろう。

通りすぎる人々

M郎はときどきじっと立ち止まる。私も一緒に立ち止まる。昼近くなった公園の通路は、いろいろの人が通りすぎる。フランス人の母親と幼児、幼稚園の子どもの行列、保育園の子ども十人くらいを一人の先生が連れて通る。その中には、流れのそばで、ゆっくりと立ち止まりたい子もいるだろう。先生が手を引いて急がせる。子どもたちはM郎を横目で見ながら行く。鞄を持つ紳士、老夫婦、掃除のおばさんなど、次々に人が通ると土埃がたつ。そのあと若い紳士が通りすぎるとき、ハンカチをポケットから出して鼻を抑える。M郎は土埃など平気である。そういう人たちとすれ違いながら、立ち止まったり、歩いたりわずかの距離の坂道を何度も行ったり来たりした。こうして十二時くらいまで、平穏に過ごした。静かな秋の午前だった。

よその人たちの視線

M郎と私は坂の上の砂場に行った。私は二、三人の親子と一緒に砂場の縁に座って

いた。M郎はそこにあったふるいに砂をいれたり、ときどき立ち上がって砂場の中を歩いたりした。そのうちに砂場の縁に七人ほど母親が腰をおろし、二、三歳の子どもたちが遊びはじめた。私は少し心が落ち着かなくなってきた。後から母親たちの会話が聞こえてくる。「うちの子はカタカナでアイウエオと読めるんだけど、イントネーションはだめなのね」「うちの子は数は百くらいまでは数えるんだけど――」など、次第に声が大きくなる。子どもたちは砂山を小さく盛り上げている。

M郎は立ち上がり、砂場の外に走り出た。ことばを話さないM郎はこういう会話に我慢ができなくなったように思えた。私がこの機会に学校に帰ろうと立ち止まると、強く手を引いて違う方向に行く。私は一方的にどんどん走って入口まで来て、道路に出ようとしたが、杭につかまって進もうとしない。エヘンエーンと大声を出す。私はあきらめ、M郎はどんどん走って砂場に戻った。砂場の場面が気になるのであろう。さっきと同じ七～八人の母親と子どもがいる。砂場の縁の外でM郎はエーンエーンと声を出し、吐きそうな咳をする。人々の視線が私共に集まった。この子はへんな子だという視線。一緒にいる大人は何をしているのだという視線。M郎は左手で自分の頬を強く打ちはじめた。否定的に話されている、その自分は悪い自分だと感じている。M郎は砂を両手で丸く積み、それから左手を砂の中に埋め、私の手をその上に重ねて砂をかけた。それを何度も繰り返した。砂場に落ちていた熊手にも砂をかけて見えな

くした。頬を打っていた手である。今日は歩いていても、立ち止まって私の手を強く引く。私の手を引いて自分の思うところに連れて行かせるという具合で、私が違う方角に行くと強く砂場の方に引っ張る。

砂場で自分の左手を埋める、その左手は頬を打つ手である。私の手は引き寄せる手、自分の拠り所とする手である。熊手――この子は欲しいと思っても欲しいと表現しない。他の子たちの遊ぶ砂場で、他の子の物を欲しくても、手を出せば何か悪いことが起こるとこの子は思っている。社会の中で自分が受け入れられていないと感じている。私の心の動揺も感じ取っている。これらのことがこの子を不機嫌にさせている。

砂場で私共に関心を持っている母親が一人いて、何かをしてくれたわけではないが助かった。

M郎は学校に帰ると、給食の味噌汁を他人の分まで食べた、満足した一日を過ごしたからだろう。M郎は絵本を抱えて奥の部屋に行った。私の手を引いてそばに座らせる。私が立ち上がろうとすると手を引きに来る。帰りには母親と一緒に私の手を引いて、公園の前の道路を走った。その後姿が孤独にみえた。

最初の日の遠くを眺めていたM郎の望んでいたのは、この公園のような場所だったのか。そこには良いものもあるし、また、受け入れてくれない社会もある。

この子は幼児期にどのような体験をしていたのか、私は知らない。しかし、この子のうつろな表情、遠くに何かを探し求める目から察すれば、幼児期の自己実現をしていたとは言い難い。幼児期に自然の物質である土、水、風、火と親しむこともなかったかもしれない。幼児期がどんなにたいせつかを、いま、私は悟らされている。

また、障碍をもつといわれる子どもと一緒に笑って楽しむ仲間の交わりをつくれたら、この子は違った姿を見せただろうと思う。

この頃の日記より

ここに神の恵みが示されているにもかかわらず、そのことに気付かない。

ロマ書1：21から

子ども自身にとって、育ちつつある体験があるように。それが子どもにとって何であるかを探りつつ、今日の労働を。

ある日の育児日記から

(89)

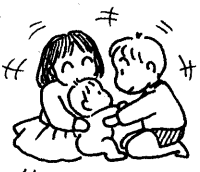
佐藤　和代

久しぶりに有が熱を出しました。熱だけではなくて、じんましんも出るし腹痛もあるし、というかなりひどい症状。それでも昼のうちは比較的元気だったのですが、夜になったら「かゆいよー、おなか痛いよー」と騒ぎ始めました。「大丈�夫、お医者さんにも行ったし、薬も飲んだから、すぐよくなるよ」となだめるのですが、だんだん声は大きくなるばかり。しまいには「病院行くー、病院連れてってー！」と泣き叫ぶありさま。

ついに敬（お父さんです）が「救急外来に連れていこうか」と言い出しました。「ひょっとして腸閉塞とか盲腸とか…」

「そんなことないって。有はぐったりしてないでしょ。こんなに元気に痛がってるんだから、大丈夫」。私だってちょっと不安だけど、有を見ていると何だかアニメの登場人物がよくやる痛がりかたみたい…。

そのうち有はスースー寝息をたてはじめました。翌朝にはけろっとしている有を見て、敬は「このやろー、やっぱりほとんど演技だったんだな！」とぶつぶつ。


イトコのこうたくんは ただいま2人のアイドル。

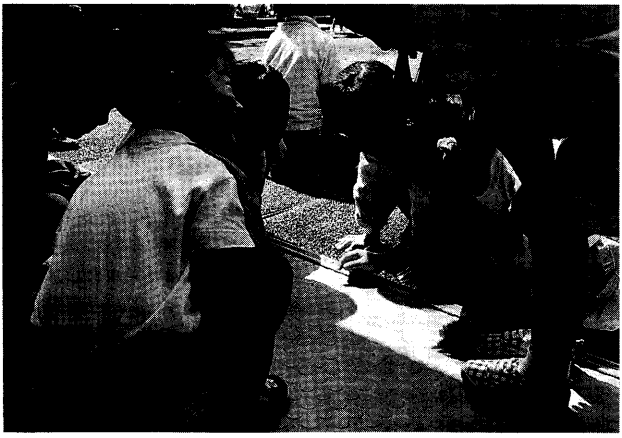
小さい頃は、病気をするたび「早くどこが痛いか言えるようになるといいのに」と思ったけど、言葉が達者になったらこれだ。ハラハラすることに変わりはないのです。

幼稚園の日々

片隅の自然の魅惑

都会の小さな幼稚園にもささやかな自然はある。5月ともなれば、花が開き、花弁が散る。鮮やかな色が砂や土に点在する。だんご虫やアリの姿にも目が止まる。小さいながらも動いている面白さなのか、突っつくと姿を変える不思議さからなのか、子どもはだんご虫を集める。ゲームのキャラクターを集めるのと同じ意味で、集めることで我がものにするのでもあろう。だがそれ以上に、生きた花や虫は、自分の普段暮らしているところに現れて、大きな自然の秘密を少しだけ語ってくれる鍵のように感じられる。子どもが虫を集めたり、花びらを手にしている様子には、その鍵を手にして、自然への驚きを分けもっているところが見えるようである。

◀だんご虫取りが流行る。プラスチックの容器に入れて持ち歩く。時々出しては、様子を見て楽しむ。



▶ホール前のテラスでもだんご虫のおひろめ会。5月の暖かさで、だんご虫も小さいのから大きいのまで、たくさん見つかる。

◀花びら集め。園庭のブランコの後ろ側はたくさん黄色の花びらが落ちている。

▶ピンクの花びらも魅力的。話しながらも、手は止まらない。

◀ブランコに乗りながらも、ふと見つけた黄色の花びらにひかれる。

写真・樋口早百合
解説・無藤　隆
協力・目白幼稚園

震災後の子どもたち(20)

わたしも子どもだったときに

上崎　温子

穏やかな晩秋の午後、乳児院の五名が近くの八幡さまに七五三参りに出かけた。その最年長Y君が生後二十九日目、夜勤の保母に授乳されているとき地震が発生。保母は揺れにバランスをとりながら、しっかりとY君を抱き授乳しつづけた――。私どもは恐らくY君の成長の節目ごとに震災を思い出すのであろう。

私の勤める社会福祉法人信愛学園は同敷地内に御影乳児院、養護施設信愛学園、御影保育専門学院があり、激震区で、園の前にある二軒の家は、腸がえぐり出されたような破壊ぶりだった。あの朝、ミルクを飲んでいたY君、飲み終えようとしていたA君の他に十八名の乳幼児が眠っていた。突き上げるような動きと大きな横揺れにキャス

ター付きの重い木製ベッドが玩具のように南北に動き、落下の音、食器等の割れる音がいっせいに起きていた。大揺れが収まるとA君をベッドに入れた保母はガスの元栓の確認をし、廊下まで飛散した食器類の破片を台所に掃き入れ施錠。ベッドの柵につかまって泣き叫ぶ子、ベッドから降り水浸しになった床に転び、泣きながら保母を追う子たち。二人の保母は震えと涙をこらえ、濡れた子らの着替えを始めた。院長が近隣の人々、園児を誘導してきた。

養護施設信愛学園には三歳から高校生までの六〇名が起居し、マンション形式で南館北館の三、四階に、それぞれ二つと六つのホームがある。南三階の①ホームは幼児のみ、北四階の⑥ホームは男子高齢児、他のホームは男女混合で、兄弟姉妹は同ホームである。

あの朝、宿直の保母三人はお弁当を作っていた。①ホームで宿直したF保母も保母室でつながっている階段を上り、②ホームの台所でお弁当の仕上げをしていた。小さな揺れが段々ひどくなるのでFは、恐怖のあまり台所に近い和室に駆けよった。途端、縦と横の大きな揺れが襲う。高二のK子は揺られながら「何よ、何なんこれ」と叫び、Fも「何よ、何なん」と口走る。あちこちの部屋から泣き叫ぶ声。家具は全て倒れ、子どもを家具の上から引きあげ居間に集めると、①ホームの泣き声がきこえてきた。①ホームの玄関のドアは外開きが幸いした。倒れた家具を除け、中に入るF保母に、②ホームの幼児は一刻も離れまいと泣きながらついていく。小学生に踊り場で幼児をみているように言いきかせ、K子と二人で三、四歳二人ずつを抱え連れ出した。一、二階の踊り場で恐ろしさと寒さに震え泣く幼い子らを、先生がいるから大丈夫と、K子も小学生もなだめていた。

やがて階下の玄関から園長と中高生男子が声をかけてきた。①、②ホーム二十名、うち幼児十四

名、着の身、着のまま、幼児は裸足で乳児院に避難した。

保母のいなかった③ホームでは最年長中二のY子が非常灯の下に集め、部屋から毛布や布団を引きずり出して皆に着せて、指示を待っていた。Y子はホームはグチャグチャ、頭の中もグチャグチャ、階下へ降りるときはフォーン状態だったと言っていたが、しっかりと行動していた。⑥ホームの男子中高生は、非常階段から、各ホームの安否を問い、南館に向った。

明るくなると被害が少しずつ判ってきた。工期の異なる南館と北館の接続した所は一階から四階まで裂け、北館は北に十センチほど動いていた。北館の西側の柱は全て圧縮破壊され、⑥ホームの降りた非常階段は崩れそうであった。誰ひとり怪我もせず無事だったのは、幸運としか言いようがなかった。

御影保専は改築して七年、軽傷だったのでそこでの避難生活が始まった。乳児院自体も軽傷だったが、東と南の川の石垣が崩れた危険な状態だったので、乳児も保専に移った。この後、外部の養護施設へ一週間、全員避難したが、北館の取り壊しと復旧までの一年半、園児は六回の移動を敷地内で繰り返した。

十七日から子どもたちは、水運び、ドラム缶カマドに火を絶やさないこと、洗濯など、当番を組んだ。それはどこの家庭の子どもも同じだった。不自由な生活であっても、子どもたちは学校の避難場にいる人々よりも随分と恵まれていることを知っていた。

私どもは、被害のなかった遠くの施設から園児をあずかるという申出を受けたが、既に施設入所という心身共に困難な適応を経験し、震災による不安を抱えている園児にとって、此処で恐怖を共にしたみんなと一緒にいることが気持ちを共有でき、不自由な生活から学ぶことも多い。又、思い

出のつまった北館が取り壊され、少しずつ再生していく姿を日々眺めることが、災害の現実認識と心の回復になるのではないかと、考え、一人も離ればなれにならないこと、そして被災の地で生活することを選んだ。

子どもと多くの職員にとってのとまどいは、ホームが解体し、南館の二階に男子、三階に幼児、四階に女子という大舎制での生活であった。そこには、子どもにとって楽しさもあったが、口にはしない苦痛もあったと思う。「北館が建ったら、またホームに戻れるね」という声は、子どもの辛さでもあったが、確実に希望があった。子どもたちは大きな問題を起こさなかった。むしろ、以前に戻った現在の方がいろいろと起こしてくれている。子どもは今どうなのか、さだかには見えない。震災以前から、彼らは深い悲しみをもっている。

私が子どもだったとき、空襲と疎開、福井大震災と水害という大きな出来事があった。阪神大震災は、その頃のことを思い出させた。大人にとっては大したことではないかもしれないが、子どもの私には深刻なことだった。

空襲警報で頭巾をかぶり二階から降りようとすると階段は爆弾の衝撃で地震のように揺れた。真赤になっている空の方の露地から沢山の蟻のように人が声もなく走ってくる。こんなに多くの人がいるのかと驚いた。家族は手をつないで、ひたすら堤防を走った。ふと顔をあげると国防服の老人が泳ぐように、さぐるかのように歩いていた。目が見えないんだ、消火していて見えなくなったのだろうかと思い振り返り、転びそうになりながら振り返るうちに老人は人波に吸いこまれていった。翌朝、焼け野原となったわが家に戻る道には焼死体があり、しっかりと赤ん坊を抱いた母親の頭には大きな穴があり真黒であった。

私たち家族は貨車に乗って疎開した。戦争が終

るまでの一ヶ月、毎晩靴をはいたまま眠り、いつもあの母親のことを、死ぬことを考えた。繰り返し、同じことなのだが、動物は人間と同じように死に、苦しいだろう。だが家具や家は苦しまないだろう。私はどうして人間に生まれてきたのだろうと。戦争が終わると死のことは考えなくなった。

戦争体験をきくという園児の宿題に真赤な空を美しいと思ったことや、子を抱いた母親の話は出来ても、あの老人のことは話したことがなかった。何かが私を引きとめた。一月十七日夕方近く、帰宅を急ぐ私の耳に、此処に三人埋まっているのですという訴えに、消防士の順番だからという答がきこえたが、その方にぼんやりと目を向け通りすぎた。ボーッとした頭にしばらくして、「又、同じことをしてしまった」と足を止めるものがよぎった。あの老人の姿であった。

自分の生命がほんのわずかな差で助かったと思った人は多い。私もその一人だ。子を失った親も、親を失った子も、もう少しこうだったらと思っただろう。突然の防ぎようのなかった自然の暴力であってもそう思ってしまう。火の迫ってくる中で柱の下になった友を助けようとして出来なかった学生たち、親と子、その心中を思うとことばがない。私は、あの老人は生きのびたかもしれないという望みと、私は八歳だったという弁解もしてみる。しかし、私が手をさし出さなかったという、あの時の思いは棘のように刺さったままだ。

福井大震災は十歳のときだった。放課後、鉄棒の逆上りの練習を終え、心地よい疲れに身を任せての帰り、東尋坊を横倒しにしたような無気味な色の雲の大群が南に走っていくのを見て、級友と地震でもきそうだと話した。その一時間後であっ

た。庭の小路で豌豆をちぎっていた私は気がつくと苺畑の中にしゃがんでおり、母が裏口に現われたとき、家は南に倒れていった。町中の家も学校もつぶれてしまったので学校に行くとか勉強が遅れるとか考えもしなかった。

担任のM先生が講堂で遊んでいた生徒を出すために逃げ遅れ亡くなったときいたのは翌日だったと思う。お葬式は記憶になく、一年後の命日に御宅にうかがったのは覚えている。夏休みの登校日は倒れた校舎にもぐって机や椅子を出す作業があり結構楽しく、みんないきいきしていた。いろんな先生との触れ合いもあった。二学期になり、M先生の死によってクラスは二分され、他のクラスに入れられたことは、吹雪くと雪が舞いこんでくるテント教室よりも辛いことであった。あれから私たちのクラスは、先生の亡くなられた所を通るとき黙礼した。それは卒業後も変っていない。

北館復旧の準備と園児の生活の場確保の作業が一段落した四月の夜、M先生のことを思った。私には良くも悪くも三十、四十、五十代を生きてきた実感がある。教師一年目のM先生にもご自身の来し方があったはずだと思うと涙が溢れた。若くして死ぬという悲しみが本当にわかったように思えた。一月十七日からの騒然とした中で卒園生、卒園生の親、愛することを教えてくれた義母の死をききながら、心にふたをしていた。そうでなければ過酷な日々を耐えられなかった。

園で屈託なく遊ぶ子らにも、人には決して話さないそれぞれの思いがあろう。園生活を共にしたT姉妹の死にK子はショックを受けていたが、ひとりその死を思う夜もあろう。又、子ども時代には気づかなかった生活の激変による大人の不安と困難の大きさを知ることもあろう。それらはみんな生きることだし、大人の支えがあれば、子どもは前に進んでいくものだと思う。

（社会福祉法人信愛学園）

『ポケットモンスター』考

――人気ゲームの光と影

山本　政人

一九九七年十二月十六日。風邪気味だった私は、早めに自宅に帰り、居間で寝転がって子どもと一緒にテレビを見ていた。午後六時三十分。子どもの好きな番組が始まり、私はビデオの録画スイッチを入れた。『ポケットモンスター』である。三十分足らずで番組は終わり、私たち親子は何事もなくのんびりと夜の時間を過ごした。午前零時近く。眠りに入ろうとしていた私に、突然妻が声をかけてきた。

「どこかおかしいところない？」

妻が何を言っているのかわからなかったが、体調のことらしいと思った。私は風邪気味ではあったが、特におかしいと感じることはなかった。

「別に」

「ポケモンを見た子どもが、次々と病院に運ばれてるんだって」

「何それ」

何が起きたのかわからなかった。早速テレビをつけると、ちょうど深夜のニュースの時間で、ほとんどのチャンネルがその事件を伝えていた。

私にも子どもにも異常はなかった。しかし全国で数百人がひきつけを起こしたり、気分が悪くなったりして病院に運ばれたという。強い光によってててんかんを起こした人もいたのだろうとは思ったが、それにしても数が多すぎるように思えた。案の定、大事件となり、放送は中止となった。同じ番組を見ていた何百人もの人が病院に運ばれたというのは確かに大事件だ。そして翌日の新聞の見出しがすごかった。

「ポケモン子どもを襲う」

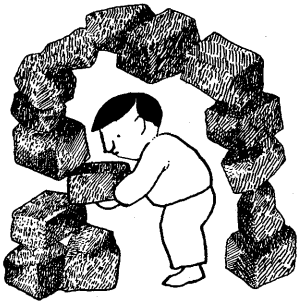
こういうセンセーショナルな文字が飛びかっていた。番組製作者、テレビ局、ゲーム会社、そして専門家がそれぞれの立場からコメントを述べていた。テレビ局は原因を調査中であり、放送は休止するということであった。専門家の意見では、原因として光過敏性てんかんが有力視されていた。

この原稿を書いている時点では、まだ原因は特定されていない。どうも光過敏性てんかんだけではないように思える。やはり異常を訴えた人の数が多すぎる。また、てんかんを起こした人がいたとしても、なぜ『ポケモン』を見てだったのか。てんかんを誘発するとされる光の点滅は、ほかのアニメでもよく使われていたという。ほかのアニ

メと違って、『ポケモン』は集中して見ていたためだとも言われるが、集中の度合によって違うものなのだろうか。やはり原因は謎である。

しかし放送が休止になっても、ゲームやグッズの人気は相変わらずである。売り上げに影響があったのかどうかわからないが、ポケモン人気に衰えは見られない。放送の再開を求める声も次第に高まっているらしい。

私は原因のことよりも、事件後のこうした動きに何となく割り切れないものを感じた。事件直後にセンセーショナルな見出しで被害を伝えたマスコミは、急に冷静になってポケモン擁護を始めた。ポケモンが悪いのではない。あくまでアニメの問題であって、ゲームやグッズは事件とは関係ない。ゲーム会社やおもちゃメーカーの言いたいことをマスコミが代弁することになった。そろそろゲームの新バージョンも出る。ポケモン人気は衰えるどころか、ますます高まりそうな気配である。確かに原因はアニメにあるに違いないが、『ポケモン』で起きたことに注意する必要があると私は思う。もし光過敏性てんかんが「集中して見ていた」ために起きたのだとすると、そこまで子どもを集中させる何かを『ポケモン』は持っていたのである。



ゲームの『ポケモン』について、中沢新一氏が『ポケットの中の野生』という本で見事な考察を

展開している。現代人のなかにレヴィ＝ストロースなどの言う「野生の思考」や精神分析で言う「対象a」があって、ゲームがそれを昇華する機能を持っていたという考察には納得してしまった。ただ、中沢氏が『ポケモン』を持ち上げすぎているのが気になった。

確かに『ポケモン』はよくできたゲームだと思う。しかしよくできたゲームは『ポケモン』だけではない。『ポケモン』ほど売れていないゲームで、深層心理に触れるようなものもいくつかある。しかし中沢氏は、その多くは「毒物をはらんだ土地」で、『ポケモン』こそ「野生の思考」にとって「健全な生育の場所」だと断言する。ひょっとするとマスコミにも中沢氏と同じような考えが共有されているのかもしれない。マスコミもただ経済効果云々ではなく、子どもたちにとっての意味を考えているのかもしれない。

しかし気がつくと事件の重みが忘れ去られているように見える。テレビを見ていて異常が起きるなど、考えようによっては恐ろしいことである。私や私の子どもも含めて、異常が起きなかった人の方が圧倒的に多かった。おそらくその人たちの多く（私の妻子も含まれる）は放送が再開されることを望んでいるに違いない。しかし原因は調査中であり（私の勝手な推測では、結局はっきりしたことはわからないのではないかという気がするが）、アニメだけでなく視聴の仕方にも原因があるとすれば、放送を再開して本当に大丈夫なのだろうか。

それはともかく、気になるのは中沢氏の「健全な生育の場所」という見解である。それを否定するわけではないが、『ポケモン』というゲームにもやはり「毒」があったのではないか。事件が起きる前から何となくそんな感じを私は抱いてい

た。「ピカチュウ、カイリュウ、ヤドラン……」とポケモンの名前を並べていく例の「お経のような」歌。子どもたちがそれを唱えているのを聞いて、何かおかしいと感じたのは私だけではあるまい。テレビをつければまた同じ歌が何度も流れ、外に出ると電車のなかはもちろんのこと、ところ構わずゲームボーイをしている子どもを見かける。もちろん『ポケモン』をしているのである。口を開けば『ポケモン』の話題で、「ゼニガメが進化したら何になる」といった話ばかりである。揶揄的になるが、これが「野生の思考」が「健全に生育する」姿なのだろうか（それ以前に、私のなかでは「野生の思考」と「健全に生育する」ということが結びつかないのだが）。

もちろん子どもたちが四六時中『ポケモン』のことしか考えていないというわけではない。勉強もし、外で遊びもし、親の言うことはよく聞いて、『ポケモン』なのである。これには感心する。私のようにほかのことをほったらかしてゲームにのめり込んでしまう人間とはえらい違いである。しかしやはり子どもたちものめり込んでいるのではないだろうか。確かに今の子どもたちはゲームとのつき合い方がうまい。大人の方がめり込んで徹夜をしてしまったり、仕事をほったらかしたりしてしまう。それでも私は子どもたちの方が精神的なのめり込みの度合は深いと思うのである。中沢氏の指摘したことは、なるほどとは思うのだが、やはりゲームには「毒」が含まれていて、それは微量でも絶大な効果をもたらすことがあるように思える。私はゲームの「毒」のことは身をもって知っているつもりである。

ここで言う「毒」は中沢氏の言う「毒物」とは違う。少なくとも「倒錯した欲望の果実」を実らせるほどのものではない。そういう深いレベルで

作用する毒ではなく、単にのめり込んでまわりが見えなくなるという効果を持つものである。これは精神に作用し、その効果が行動に現れる。すなわち、勉強や仕事を忘れてゲームをしてしまうとか、気分が悪くなるぐらいゲームの画面に見入ってしまうといった状態である。過度ののめり込みが今回の事件の原因だとは言わないが、一つの要素ではあったかもしれない。

再び中沢氏の見解についてである。氏は多くのゲームは「野生の思考」の健全な生育の場所ではなく、「倒錯した欲望の果実」を実らせるもので、『ポケモン』だけが例外だとしている。この点だけは同意できない。確かに『ポケモン』は「倒錯した欲望」とは無縁であるように思える。しかし「のめり込み」と「倒錯した欲望」とは、実はつながっているのではないかという気がする。強さは違うが、同じ種類の毒のように私には思えるのである。

ゲームはこれからも広く深く子どもたちのなかに浸透していくことだろう。大人たちはそれがどういうことなのかわからないまま、ゲームを否定したり肯定したりしている。おそらく否定する意見は減ってきており、今後肯定派が増えていくに違いない。ゲームにはそれをプレイする者にしかわからない「よさ」がある。しかし同時に、プレイする者にしか、あるいはプレイする者にさえわからない「毒」が含まれている。ゲームをするたびに私はそう思う。そして安易に肯定も否定もしたくないと思うのである。

（お茶の水女子大学）

夢の日々(五)

枝の一生

大多和　檀

芋掘り遠足のあと、やき芋作りをしますが、神明幼稚園では、落ち葉や枝を、JR浜松町駅の南にあります旧芝離宮恩賜庭園に集めに出かけます。

せいちゃんは枝が大好きで、園校内や遠足でもよく枝を拾って遊びますので、「せいじは枝見つけるの得意」と言って大活躍です。そのせいちゃんの動きにつられて、ふみちゃん、さおちゃんも、「こんな枝見つけた！」と、どんどん拾うので、園から持っていった袋はパンパンを通り越し、私も三人もすごい荷物をかかえて門まで来ました。

芝離宮の受付けのおじさんが見かねて、「神明小ならそばだね。これを貸してあげよう」と、荷車を貸してくれました。

私がひもをかけた時は、枝がグスグスに落ちてしまいましたが、「どれかしてごらん」と言っておじさんがかけると、どの技も落ちません。「こんな短いひもですごい！」とおじさんの〝技〟に感心して町中を荷車をひいて帰りました。園に着くとすぐ、枝、落ち葉をおろし、私達年長組は荷車を返しに、今度は自分達

▼芝離宮での収穫

上にのっている枝が「自分の木」から「クリスマスツリー」になった枝です。

が荷車にのって行きました。

何と言っても浜松町の町中を、たくさんの枝や子どもがのって通るのですから、道中、サラリーマンから「おお！」「何するんだ」「いい自家用車だね」などと声をかけられ、私も荷車初体験で、記録を読み返してみると「近年にないおもしろい体験だった」と書いてありました。これは十一月一日のことです。

さて、枝の方ですが、次の日、やき芋作りに使う枝と、「これとっておく」という枝に分けられ、「とっておいた枝」はいつも自分達の保育室の前に置かれて、三人の生活の「友」となっていきました。

枝はさらにカレー作りに使われたあと、〝枝ぶりのいい枝〟をそれぞれが選んで、「自分の木」が出来ました。

ふみちゃんは自分の木に鳥を、さおちゃん、せいちゃんはリスを作ってのせ、巣が出来たり、鳥、リスの〝家族〟が増えたりして、三人で人形劇やお家ごっこの様にして遊んでいました。この三人の木は、十一月の小学校と一緒の展覧会にも出品されました。

そして、十二月に入ると、三人の三本の木は一つにまとめてクリスマスツリーとなったのです。

この頃が、枝の「華の時」でしょう。

この間、棒の様な枝は、雪や氷をかきまぜるのに使われたりサッカー遊びの線引きに使われたり、ピストルの様に使われたり……。

▶「自分の木」で遊ぶ三人。ふみちゃんの木（上右）の右はじの白いのは鳥の卵。さおちゃんの木（上中央）にはくまが遊びにきたそうです。せいちゃんの木（上左）の手前の白いのがリスの巣で、写真下手前の牛乳パックにのっているのがリスのお父さん。

▼お米を蒸しています

私もせいちゃんもさおちゃんもふみちゃん（見えませんが）もみんなが枝を手にしています。

三学期には、モチつきがあり、クリスマスツリーとなった枝は、ついにお米を蒸す為のたき木となって消えていきました。

卒園の時まで残った枝は、結局、せいちゃんが、「これほしい」と言って家に持ち帰り、保育室の前にいつもあった枝はなくなったのです。

十一月～三月までの「枝の一生」の話です。

振り返ってみると、三人の生活

は、いつも充分な時間があり、ふみちゃん、せいちゃん、さおちゃんは、それぞれが自分のペースで、自分の生活と三人の生活の間を行ったり来たりしていました。

今、私のいます園は木にかこまれ、ちょっとした林もあります。が、「枝の一生」の話はありません。

毎朝、林の中を歩くたびに、「夢の日々」を思い出しています。

（まこと幼稚園）

▼拾ってきた枝は、たき木にされるだけではなく、火の様子を見る棒としても使われました。

滄桑の街・香港から(6)

香港の語学事情

今井　七重

香港では英語が日常で、ほとんどの人が流暢な英語を操るものだと思っていたのですが、現実はかなり違っていました。そしてその裏には、色々と複雑な教育事情が背景にありました。街中で聞こえるのは、英語よりも圧倒的に広東語です。地元のスーパーでは、まず広東語で話し掛けられ、キョトンとしていると、ようやく片言の英語でコミュニケーションがはじまるといった具合です。ほとんどの店員は、数字を英語でいうことや「キャッシュ、オア、チャージ」などという最小限の英語は使えますが、それ以上話が複雑になると、立ち往生する人が多くなるのも現状です。もっとも普通に買い物する

ぶんには、片言の下手な英語で十分なわけで、こちらの日本人の間では、冗談ぽく、「殿方の流暢な英語よりも、奥様方のたどたどしい英語の方が却って通じる」といわれる程です。

香港で、なんらかの語学を習得したいと思ったら、やはり実戦と言う点で、英語よりも広東語になりますが、この広東語、益々需要がなくなりつつあります。返還後、香港では北京語の授業時間が義務づけられましたし、よりよい就職先を求めて、北京語をならう香港人も多くなりました。政府系の一部では、すでに電話の応答が北京語で行われていますし、銀行のテレフォン・バンキングでは、最初に北京語、広東語、英語の三つの録音テープが流れてきて、返還前より時間がかかるようになりました。

ところで、北京語、広東語は、同じ中国語なので習得は楽なのではないかと考えますが、実際は、発音がまるで違うし、文法も異なるので、仮に聞き取りは出来ても、香港人には正しい発音、正しい文法で話すのは難しいそうです。つまり全く別の語学を学習するのと同じ感覚です。

さて、香港の中学校の約三十パーセントは、中国語（主に広東語）で授業をしている中文中学で、残りは全て英文中学、もしくは中英二ヵ国語で授業を行う中英文中学です。これらの学校では、国語や中国史の授業は中国語で行いますが、数学や理科などは英語で書かれた教科書を使い、テストの答案も英語で書きます。ただし、先生も生徒も香港人なので、授業はもっぱら広東語で説明するという、まだるっこさがありますが、日本との比較でいえば、英語に対する絶対量に違いがあります。又英語が将来お金につながるという現実があるので、英語に対する真剣度が違います。「有名大学に入れば、将来安定」という、日本の進学熱に通じる部分が、香港の英語熱に当たるほどです。

向上心の強い人たちは、ここで猛然と英語に励み、アメリカ資本の企業、香港資本の大企業へ華々しく就職、香港の大手町にあたるセントラル等で働きます。一方、英語になじめなかった人たちは、私が日常買い物するテリトリーで仕事をするわけです。私が、意外と英語が通じないと思ったのは地域的なもの及び、職種のせいだったようです。しかし、片言とはいえ、ほとんどの人が英語を話せるし、外国人から話しかけられてもたじろがないのは、教育形態及び日常少しでも英語を使う機会があるからだと思われます。

一九九七年の返還で、政府はこの教育制度を変え、この九月から、香港中の中学一年生に対する北京語教育を前面に出してきました。しかし、その一方で、一〇〇の中学校に従来同様の英語での教育を認可しました。この結果、小学六年生の五人のうち一人が英語中学に通えることになりました。

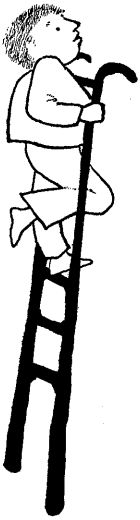
一〇〇校のリストが公表されると、対象外の学校から、選定方法に問題ありとクレームがついたりと波紋を呼びましたが、一番の問題は、そこから派生する、当事者およびその親たちの悲劇です。将来を約束される英語力を我が子につけさせたい、そのためにも母国語ではなく、英語を重視する選ばれたブランド校一〇〇校に通わせたい……。熾烈な戦いが始まるわけです。同じようなことは、どこの国にもありますが、中国になった香港で、英語が上達しないことを悔やみ、そのために有名校に入れないことを後悔する、英語で一喜一憂することがあるというのは、皮肉な事です。

英語教育については、昨今、日本でも検討されているようですが、香港の現状を垣間みて、明確な目的意識と実戦を伴うことの必要性を感じます。

これから香港は、旧正月を迎えます。来港以来、色々な祝日行事がありました。暦の上でお休みなの

に、果たしてどういう内容のお休みなのか良く分からないものもありましたが、一番印象に残っているのは、九月十七日にあった仲秋節です。これは、日本のお月見とお盆を一緒にしたようなものです。十四世紀元朝の頃、朱元璋という漢人の指導者が、月餅の中に「仲秋の夜漢人は決起せよ」と書いたメッセージをいれ、漢人の家々に配り、元朝を亡ぼしたといわれます。この後仲秋の夜に月餅を食べるのが一般的になり、今でも九月にはいると月餅が街中で売られ、当日までなんだか町全体がそわそわした雰囲気になります。

甘いものには目がない私は、どこのお店の月餅を買おうかな……と品定めをしていたのですが、長年香港に住んでいる日本人に「経験してみる必要はあるかもしれないけれど……」と暗に買うことを辞めるようにいわれましたが、理由は一口食べてみてわかりました。形は、日本の月餅に似ているのですが、中央に月に見立てたアヒルの卵が入っていて、その数が多いほど値がはり、直径八センチ程のものが、一個七〇〇円以上もします。味の方は、日本のそれとはかなり異なり、アヒルの卵のパサパサ感とあんこのねっとり感が、日本人好みとは言い難く、私も来年は遠慮したい気分でした。もっとも日本の月餅もこちらの人には、物足りないといって、うけ



ないようですから、お互い様といったところでしょうか。

当日は、香港人にまじって、お祭り気分で催し物が行われるヴィクトリア公園に勇んで出かけたのですが、香港の天気の気まぐれさを又しても思い知る結果となりました。それまで、雲一つない天気で、傘のことなど問題外だったのに、突如ポトポトきたかなと思うと、ダーッ。屋根などあるはずのない公園の中を、せめて大木の下にでもと大急ぎで走りましたが、ほとんど意味がなく、びしょぬれになりました。「このまま帰るなんてつまらない、何も見ていないし、していない」と不満をいう子どもを、早く帰らなければ風邪をひいてしまうとせかし、タクシーで帰りました。しかし、家に帰り着く頃には、雨は勢いがなくなり、あろうことか、シャワーを浴びたら、すっかり雨は上がっていました。仲秋節を楽しんだというより、仲秋節の日に、香港らしさを別の意味で味わいました。さて、旧正月は、どんな展開になるのでしょうか。

四月に香港啓発空港に降り立って感じたのは、むっとする熱気と街全体から漂ってくる不快な匂いでした。どこもかしこも、異様な匂いがすると思っていた私ですが、今回、お正月を海外で過ごし、香港に戻ってきた時、あれほど嫌だと思っていた匂いなのに、なぜか懐かしく感じている自分に驚きました。

うまく、表現できませんが、香港の魅力に、知らず知らずのうちに、ひきこまれているのかもしれません。残り、一年、感じてみます。

――終――

（元幼稚園児の母・香港在住）

A夫との日々

吉岡　晶子

――六月のある日の出来事、A夫は大声でワーワー泣きながら、自分で車のドアを開け、車を降りた――

日頃よくある保育の一コマのように見えるが、私にとっては感動的な忘れられないシーンである。

A夫は三歳児。入園してすぐの頃から、興味のままに、園庭、ゆうぎ室、他のクラスとどこへでも出向いて遊んでいた。そこで目に入ったものや気持ちをそそられることは、何でもその場で欲しくなり、すぐにやりたくなって実行に移すA夫。行く先々でトラブルが起きないはずはなく、「ワーンワーン」のA夫の大きな泣き

声か、「A夫君がやった……」の泣き声が聞こえない日はなかった。A夫にしてみれば欲しいのに手に入らない、やりたいのにやれないということになり、相手にとっては突然に取られた、やられたという感じであった。このようなA夫が幼稚園という新しい環境の中で様々な体験と葛藤を繰り返してきて、少しずつ周囲の状況の受け止め方やかかわり方が変わってきた。A夫との日々を、エピソードを思い起こしながら振り返ってみる。

それ欲しい――四月――

降園時間が近くなり、A夫がニコニコして部屋にもどって来た。他のこども達は帰る準備をして椅子にすわっている。A夫はB子のところにスーッと近付き、あっという間にB子が手に持っている紙で作ったアイスクリームを黙って取ってしまった。B子は泣き出す。二人で引っ張り合うがA夫も口にくわえて離さない。私は急いで同じものを作って「こっちがA夫君のね」とA夫に渡すが、受け取らず振り払い、ワーワー泣いて「A君の、A君の（自分のこと）」とB子のアイスクリームを握って離さない。A夫はB子の持つそのものが欲しいのであって代りのものは別のものなのである。B子も新たに作ったアイスクリームでは納得できないので、なんとかB子に戻した。

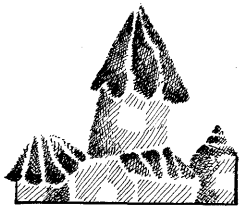
A夫にとっては欲しいものは何がなんでも欲しく、人のものも自分のものも同じ、それが実現できない状況は受け入れられず、抱かれたまましばらく泣いていた。このようなことがままごと道具だったり、作ったピストルや剣だったりと度々起きたが、「欲しいのよね、でもね……」と言いながら、大泣きするA夫の気持ち

に付き合うしかなかった。

誕生会のおやつ――四月――

はじめての誕生会の日。おやつのマドレーヌが一つずつお皿にのって配られた。はじめての体験なので〝いただきます〟の前に食べ始める人もいたりする。

ふと見るとA夫のお皿にマドレーヌが三個並んでいる。両隣りの二人のマドレーヌがなくなっているが、二人共キョトンとして状況がよくわかっていない雰囲気。思わず私が「これがA夫君のお菓子ね。これはC子ちゃんのお菓子、これはD夫君のお菓子ね」と戻すと、A夫は「ワーッ」と泣いて取り戻す。私がまた元に戻す。A夫にだけ三個あげるわけにはいかない。そのうちに、A夫は床にひっくりかえってワーワー泣き、なだめても抱いてもなかなか泣き止まない。「おかあさん、おかあさん」と言いながら泣くので一人だけ早目に降園準備をすると、もうすぐおかあさんに会えると思ったのか気持ちが少し切り替わり、落ち着いてきて泣き止んだ。でも、お菓子は何も食べずに終ってしまった。たくさん食べたかったのに何がいけないんだ、あれはぼくのものだという泣き声で、自分がしようとしたことにストップがかかったことが受け入れられず、そこからなかなか立ち直れなくなってしまった。だが、自分の状況が変わることで少しずつ自分の気持ちも切



り替わっていった。

このような出来事を繰り返していくうちにA夫にも変化が見られるようになった。

E子の袋――五月下旬――

E子が小さいビニール袋に砂利を入れて持っているのを見たA夫は、それが欲しくなったのかスーッと手を出す。その様子を見た私が、これは取ってしまうかも知れないと思い、「あれが欲しいの？　あれはE子ちゃんのもの、A夫君、待っててね」と言って急いでビニール袋を持って来た。A夫の目の前で「A夫君のはこの袋ね」「これがA夫君の」と言いながら袋に砂利を入れ、砂利袋を作って手渡すと受け取った。私がビニール袋を取りに行く間に手を出さずに待っていたこと、同じ様に作った別のものを受け取ったこと、共に驚きでありうれしい出来事だった。

A夫は、これまでの経験の中で、止められるだけでなく待つことを知ったのだろう。随分我慢もしたし、待った。待っていれば大丈夫ということを体験してきたことで待てるようになったのではないだろうか。

追いかけっこ――五月下旬――

A夫は廊下（我が園では長い廊下がある）で私を見つけると、私の顔を見てニコニコして逃げる。私は追いかける。A夫は立ち止まって後を振り返り、私が追いかけるのを待っている。またキャーキャー笑いながら逃げる。私が追いかける。A夫はまた止まって振り返る。これを何度も繰り返した。この時A夫ははっきりと相手を意識していた。しかも、自分が追いかける

のではなく、相手が来るのを期待して待ち、そのやりとりを楽しんでいる。それまでのA夫は自分の方から一方的な関心で追いかけたり向かっていく姿は見られたが、されるのを待つ、それも相手をちゃんと意識しているというのは見られなかった。

この頃、A夫が欲しいものがあると「貸して」と言うかわりに「貸してやる」という言葉が聞こえるようになり、それは相手側の言葉で、何度も言われてきた言葉であった。このような小さな変化や出来事が見られるようになり、私もA夫と楽しんだり、笑ったり喜んだりしていた。

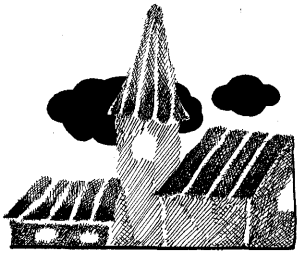
車を降りた日——六月——

ハンドルつきの一人乗りの車が園庭に登場して二日目。前日にもA夫はその車にたっぷり乗っていた。この日は、車に乗りたい人が何人もいて順番を待っている。年長児のリードで花壇を一周回って来て次の人と交代するという流れになっていた。A夫が車に乗り、年長さんが押して花壇を回り、みんなが待つ所にもどろうとすると、A夫が「あっち、あっち」と自分が行きたい方向へもっと遠くまで押してくれと指差すのである。「向こうに行きたいって言ってるんじゃない？」「でも、向こうで待ってるし……」など年長さんは口々に言い、どうしようか迷っている。A夫は「あっち、あっち」と言いながら大泣き。私は任せることにした。車はゆっくりと少しウロウロしながら戻って来たが、A夫は降りないで泣きながら「あっち」ともっと乗りたいことをアピールしている。「降りてね」「交代して」と頼むがA夫は降りない。「この子、きのうもずーっと乗ってたよ、もう

いいよ」という声も聞こえてくる。周囲もどうしよう、何とかならないかという雰囲気になる。

その時、A夫はワーワー泣きながら、自分で車のドアを開けて降りたのである。A夫は誰かに引っぱられて降ろされたのでなく、自分の意志で降りたのである。私は驚き、感動してしまった。近くにいた他の先生も驚き、二人で顔を見合わせてしまった。〝本当はいやだ、でもこの状況は受け入れざるを得ない、ぼく我慢する〟と泣いているのであろうA夫の顔は涙と鼻水でぐしゃぐしゃ。そういうA夫と、他の先生も私も（途中で交代）一緒にすわって順番が来るのを待ち、A夫は再び乗ることが出来た。

無理矢理A夫を車から降ろすのでなく、A夫の気持ちも考えてくれた車を押す人たち、順番待ちの人たち、みんながA夫にじっくり付き合ってくれたからこそ見られた光景だったと思う。



二学期になると、A夫の「先生！先生！」と叫ぶ声がどこからか聞こえてくるようになった。声のする方に行ってみると、車を押して欲しいということだったり、水に濡れた靴と靴下を何とかしてということだったり、自分では開けられないドアを開けて欲しいということだったりする。困った時や助けて欲しい時には、姿

は見えなくとも呼べば先生が来てくれると思っていたのだろう。これまでに、あちこちでトラブルが起きた時にはいろいろな先生がその都度かかわって何とかしてくれた。その体験の積み重ねで、頼れる人としての先生がA夫の中に位置づいたのであろうと思う。「先生！」が聞こえると、さて今日は何かなと思いながら声のする方に出掛ける日が続くようになったのである。

A夫はとても素直に自分の欲求を表わす。表現は一方的だったが、表わすことで様々な体験をしてきた。予期せぬ反応、断わられること、怒られること、でも楽しいことや嬉しいこと、譲ってもらったこともたくさんある。それらを体験しながら、A夫も少し譲って受け入れてもらえることも体験した。反応を受け、A夫もまたそれに応えるという周囲とのかかわりの中で少し我慢したら心地良いことにつながることがあることも感覚として知ったのであろう。

今までさんざん泣いて「どうしたの？」「どうしたいの？」と声をかけてもらってきたA夫は、今では、泣き声が聞こえるとどこからともなく現れて、「どうしたの？」と声をかけたりしている。そんなA夫との日々はとても面白く楽しい。

いろいろなことを巻き起こすA夫と一緒に遊んだり、泣いたり笑ったり怒ったりして本気で付き合ってくれる幼稚園中のこども達、それを支えながらていねいにかかわってくださる幼稚園中の先生方、みんなみんなにA夫と私共々本当に感謝している。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

編集後記

「滄桑の街・香港から」は、今回が最終回です。香港にとって、〝滄桑―移り変わりの激しさ〟がキーワードであり、今回の返還もその一つ。この連載を通して、数々の滄桑を支えてきたのが、香港で生きる人たちのおおらかさ・たくましさであることを、垣間見ることができました。

＊

端午の節句が近づいたLの幼稚園では、新聞紙で兜と剣を作ります。剣は、朝刊一回分位をそのまま丸めて、それを赤・青・黒などのビニールテープでぐるぐる巻いて作られました。兜をかぶりその剣を持てば、たたかいごっこが始まります。

家に帰っても剣作りは続きます。友人と賑やかな会話を交わしながら剣は作られ、堅さや重さが試され、弱いものは曲がったり折れたりして淘汰され、それぞれのお気に入りが常備されます。こうして、何本もの剣が作り継がれてきました。

それから七年が経ちます。わが家の遊びのスペースには、今でも十本の剣があります。その中には、逃げる相手の背中めがけて投げつける〝チクリン（短く弱く軽い）〟、相手のお尻を叩く〝ペシペシ（堅さが足りず中央で折れ曲がっている）〟など、説明を聞いて始めて納得できるものもあります。

子どもたちの〝たたかうこと〟へのつきない興味と、それをも遊んでしまう生命力には、感心させられます。

（A）

幼児の教育

第九十七巻　第五号
（一九九八年五月号）
定価五五〇円（本体五二四円）

発行　平成十年五月一日
編集兼発行人　田代和美
発行所　日本幼稚園協会
〒112－8610 東京都文京区大塚二丁目一一一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
印刷所　図書印刷株式会社
〒108－8620 東京都港区三田五丁目一二番一一
発売所　株式会社フレーベル館
〒113－8611 東京都文京区本駒込六丁目一四番九
☎〇三－五三九五－六六一三（営業）
☎〇三－五三九五－六六〇四（編集）
振替　〇〇一九〇－二－一九六四〇

☆本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

新刊!!

手づくり誕生会12か月

（全３巻）

本書があれば、
誕生会のすべてが手軽にまかなえます。

阿部　恵　編著

『手づくり誕生会12か月』

①4～7月

『手づくり誕生会12か月』

②8～11月

『手づくり誕生会12か月』

③12～3月

●制作物（カラーページ）

クラスごとに必ず飾られる「誕生表」、子どもに渡される「誕生カード」「誕生プレゼント」のアイデアと実物見本を豊富に紹介。

●出し物

楽しさを演出する「パネルシアター」「ペープサート」（いずれも脚本付）をはじめ、絵カード遊びや簡単な手品等も掲載。子どもを少しも飽きさせません。いずれも型紙付きなのですぐ作れ、多忙な保育者にとってうれしい一冊です。

ＡＢ判　各96頁

各定価：本体2,500円＋税

セット定価：本体7,500円＋税

キンダーブックの
フレーベル館

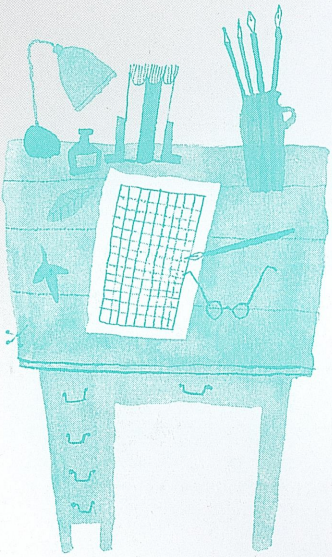
くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育　第九十七巻　第五号　平成十年五月一日（毎月一回一日発行）昭和二十三年四月十五日第三種郵便物認可

倉橋惣三 保育へのロマン

荒井　洌・著

「倉橋は決して古くない」。日本保育界の巨人・倉橋惣三の思想・理論を現代保育の現場に生かす道を明らかにした注目の本。月刊誌「保育専科」に好評連載されたものを中心に書き下し部分を加え、明日の保育現場で使えるように、分かりやすく的確に倉橋理論を解説します。



A５判・220頁・定価：本体2,000円＋税

キンダーブックの
フレーベル館

定価　五五〇円（本体五二四円）☆

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。